55歳のつぶやき

人との触れ合いを求めて

森本忠則（高32回）

この原稿を書くにあたり、真っ先に思い浮かんだのは、30年間働いてきた仕事のことではなく、幼い頃に過ごした故郷・川路や、家族や友人と触れ合い過ごした楽しい記憶でした。

昔から私は、そのときそのときで、夢中になれる何かを探してきましたが、今の私は、何を探しているのでしょうか？　思うままに、つぶやいてみたいと思います。

ワインとの出会い

大学卒業後の1985年、ワシントンホテルチェーンに就職しました。ホテルが今のように身近ではなく、富裕層や外国人のものだった時代です。

ホテルの仕事は宿泊と飲食部門に分かれ、私は飲食部門配属となりました。ウィスキーやカクテルが全盛の頃です。しかし、慣れない仕事内容や毎夜深夜2時までの営業時間に限界を感じて、上司に相談しました。すると、「これからはワインの時代が来るから、ソムリエに挑戦してみたらどうか」と諭されたのです。この言葉が私を変えました。

●もりもと・ただのり
川路出身。大学卒業後、ワシントンホテル（株）入社。現在、長野県観光機構物産振興部勤務。日本ソムリエ協会公認呼称資格ソムリエ取得。長年の単身赴任を終え、13年ぶりの家族との同居生活を楽しんでいる。

ソムリエは、コンテスト等を目指す学者タイプと、お客様密着の役者タイプとに分かれますが、私は後者でした。サービスに徹し、人を喜ばせること、この経験が、今の私らしさという個性を作ってくれたのだと思います。

’98年から12年間、単身赴任生活を送りました。松山市に4年、金沢市に半年、島根県浜田市に8年、この時期の私は、「県外で知らない人達と協調していく」方法を探しました。

行きつけの店を作って通い、会社組織に囚われない異業種の集まりを企画しました。さまざまな年代の人たちと知り合いましたが、「温故知新」「一期一会」という気持ちが強まったように思います。

ホテルマンからの脱皮

2014年、高校の先輩の紹介がきっかけで、東京に新規オープンする長野県のアンテナショップ「銀座NAGANO」に転職しました。長年、沁みついていたホテルマンのイメージを払拭して、心機一転、働いてみようと思ったのです。

開店から慌ただしい日々が続いていた16年の春、1学年上の先輩から、在京同窓会の幹事の話を頂きました。私たちの学年は、卒業25周年の同期会を開いておらず、同級生の所在もわかりませんでしたから、私につとまるか不安でしたが　やりがいも感じ、引き受けることにしました。

37年ぶりに在京同窓会で再開した同期生たち

それからは、プライベートな面でさらに慌ただしくなりました。同級生たちの情報を集め、在京で連絡のつく同期生らとの再会を果たしたのが、今年の1月です。そのときに集まった皆の笑顔がなんと純粋だったことか！　そんな彼らの姿を眺めながら、私が長年探し求めてきたことはこれだ、と確信したのでした。

幹事会のスタートを切ってまもなく、私は長野市へ転勤することになりました。在京同窓会幹事長の役を仲間に託すとき、もっとたくさんの笑顔に会いたいと思ったのです。そこで皆に、来年、地元での同期会開催を約束しました。

現在、地元の長野市や飯田在住の同級生らと協力して、着々と同期会の準備が進んでいます。友人たちとこれらの準備をしている今が、いちばん自分らしいのかな？　と思っています。

銀座NAGANO時代に学んだのは、「アフターサービス」の重要性です。買い物をするだけなら、商品があればどこでもまかなえます。しかし、銀座という街は特別な場所であり、買い物をした後のお付き合いをとても大切にしていると感じました。

それは、同期会が終わった後、どうあるのがよいのか？につながります。懐かしい友人たちとの集まりを単なる飲み会に終わらせることなく、新しいストーリーをつくるためのお手伝いをすることが、今後の私の役割であり、最大の楽しみです。

高校卒業後、約37年熟成してきた「同級生」というワインが、いま飲み頃を迎えつつあるのを感じています。